

現代英米演劇の研究

内 野 儀

昨年度の本欄の冒頭で、文部科学省による補助金の問題に触れた。固定的な運営交付金が毎年削減されていく一方、競争的資金としての補助金へとその予算はシフトしてきており、早稲田大学の「演劇・映像の国際的教育研究拠点」事業等が大きな成果を残したグローバル COE に続くと目される博士課程教育リーディングプログラムでは、人文学における研究者育成はほぼ全面的に排除されることになったのではないかと、という主旨であった。同リーディングプログラムでは、大学院教育プログラムでありながら、最長で7年という期限が設けられ、予算も単年度ごとの見直しが入り、大幅削減もありうるという、研究者育成としての大学院教育にとっては、過酷としかいえない条件になっている。ついに教育でさえも、このような「管理と制御」にさらされることになったのか、という感慨深い事態である。特に演劇学・演劇研究を含む人文学のように、いわゆる成果が短期的には見えにくい分野にとっては、昨今マスメディアを賑わせることが多くなった大学における文学部不要説、あるいは極端な場合には、文系諸学部不要説とどう向き合うかが問われているのである。そのこと自体はある種の歴史的必然であり、ここで論じるべき問題でもないが、「現代英米現劇の研究」という本欄でこの話題を持ち出したのは、演劇研究におけるある種の興味深いシフト現象がこのこととの関連で起きているからである。

というのも、大学ではなく一般社会における芸術文化活動の振興やそれへの支援を旨とする文化庁が、グローバル COE 事業終了と時期をあわせるように、2013年度から「大学を活用した文化芸術推進事業」という「大学」を対象とした助成事業を開始したからである。さらに、2011年から始まっていた「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」においても、13年度からは、「芸術系大学等連携」という分野がもうけられた。それぞれの趣旨は、関係 HP 等で確認していただきたいが、その名称からも明らかのように、芸術系大学ないしは芸術系学部への財政的支援が中心となっている。また、昨年の本欄でも触れたように、現在の潮流に沿うように、「人材育成」（「研究者育成」ではない）が前面に押し出されてもいる。芸術系であるから、「アートマネジメント」という分野ないしは職能が、これらの事業の「人材育成」の目的・内実とされている場合が多いこともその特徴である。しかしながら、演劇研究者は、伝統的な文学部所属の文献学・批評中心の研究者だけではない。演劇実践や創作の現場に近いところで、実践的な活動を展開する人もこれまででも多く存在していたのである。今回の文化庁の「方針転換」は、研究者と実践家とのこれまでにない協力関係が構築される

現代英米演劇の研究

可能性を示すものとして注目に値する。

たとえば件の早稲田大学では、2013年度に「新しい演劇人〈ドラマトゥルク〉養成プログラム——未来のアートマネジメントに向けて」が「大学を活用した文化芸術推進事業」の一つとして採用されたが、この事業では、グローバル COE の成果を受けて、その継続とも思えるような活発な国際的な研究活動が行われることになったのである（しかし、通常では考えられないことだが、当該補助金は1年で打ち切られてしまった。その理由は定かではないが、前述の「管理と制御」とかかわる理由によると一般には考えられている）。あるいは、舞台芸術研究センターをもつ京都造形芸術大学では、フランス演劇研究の第一人者であり、また演出家でもある同センター長（申請時）であった渡邊守章氏を中心として『大学の劇場』を活用した総合的な舞台芸術アートマネジメント人材育成事業」が開始されたが、こちらもまた、研究的色彩の強い事業であり、今後の展開が注目されている。つまり、文献学的・批評的研究と創造の現場という現代演劇研究——少なくとも日本においては、との留保は付ける——にとって、長い間埋められないと考えられてきた溝に、橋が架かる可能性が出てきたのである。

もちろんこうしたいっさいは、演劇研究のみならず人文学に補助金など必要ないという「抵抗勢力」の声高な合唱によって、結局のところ、一時的な動きに終わるだけかもしれない。他方、実践家サイドからいえば、90年代初頭から順調にその額を増やしてきた芸術家や創造活動への公的助成の一部が、大学という本来文部科学省本体（文化庁は、周知のように、文部科学省内に位置づけられている）が管轄すべき機関へと流れてしまうということから、何らかの異議申し立てが出てくることも考えられる。演劇学という、日本のアカデミアにおける「鬼っ子」だけに、今回の〈構造改革〉への動きには、今後とも注視を怠らないでいたいと思う次第である。

一方、「演劇・映像の国際的教育研究拠点」事業のその後、ということでは、本事業で中心的な役割を果たしたベケット研究の岡室美奈子氏が早稲田大学の演劇博物館の第八代館長に就任し、まさに拠点事業における成果を生かした新鮮な運営が始まっていることに注目しておきたい。また、研究的成果では、本事業で活躍していた川島健氏が、『ベケットのアイランド』（水声社）と題されたこれまでの研究成果の集大成的な単著を出版した。

本書は川島氏の博士論文が元となっているが、序章と終章を含めて全9章からなる。序章につづく第1部「ダブリン」は、第1章「境界線の女たち」と第2章「越境するクーフリン」、第2部「言葉の場所」は、第3章「ダンテ、ジョイスについて語ること」、第4章「翻訳の不協和音」と第5章「本当の名前と翻訳可能性」、第3部「どこでもない場所」は、第6章「アイランドを描くこと」と第7章「廃墟の存在論」、そして終章という構成である。各部各章のタイトルを見てもわかるように、本書は包括

回顧と展望

的なベケットの作家論であるが、そこに「アイルランド」を鍵概念として置いたことが、その大きな特徴である。単に地理的領域としてのアイルランドではもちろんない。記憶のなかの、歴史のなかの、同時代の、表象史的イメージの連鎖のなかの、作家の経験としての等々、多様な「アイルランド」である。著者自身の言葉でいえば、「伸縮自在で、複数のコードによって規定され、明確な境界によって囲うことができない空間」(226)としての「アイルランド」である。こうして川島氏は、批評理論や哲学的概念を駆使して抽象的にベケットを語るといふ、わたしたちが慣れ親しんだベケット研究の方法からあえて離脱して論を展開してみせる。つまり、いい意味での伝統的な手法が取られているのだが、しかしそれは、けっして反動ではなく、ポストセオリー時代のベケット論なのである。本書の主旨は、次の一節に集約されている。

ベケットにとってアイルランドは常に戦いの場であった。芸術のため、生活のため、必要に迫られて、詩、散文、小説、エッセイ、書評など様々なジャンルを探索するベケットだが、そこに垣間見えるアイルランドの風景は、いかに静謐にみえようとも、背後にそれを突き破るようなマグマを宿している。束の間の静けさはそれを囲む敵対勢力同士の緊張関係の産物だ。ときには内部から、ときには遠く離れて、様々な角度からレンズを当てるようにして、ベケットはアイルランドを描き続けるが、それが真空地帯にうごめく力を浮かび上がらせる方法だ。彼が試みる様々な文体は、戦場のポリティクスを写し取るための試行錯誤の記録でもある。(27)

このように平易な文体でベケットと「アイルランド」の関係を的確かつ印象深く語った文章に、わたしはこれまで出会ったことがない。日本におけるベケット研究の新たな出発点として、本書が記憶されることになるのは間違いないところだと思われる。

さてここからは例年通り、まずはアメリカ演劇関係の研究動向を見ていくことにしたい。2010年にアメリカ演劇研究者会議から日本アメリカ演劇学会へと大きく組織を変更した同学会では、年1回の全国大会の開催と『アメリカ演劇』誌の発行を着実に継続している。2013年度の全国大会はユージーン・オニールをテーマにして9月に開かれたが、そのプログラムは以下の通りであった。研究発表として、「ポストモダン演劇におけるオニール——The Wooster Groupの*The Emperor Jones*と*The Hairy Ape*」(佐藤里野氏)、「『海』から『家』へ——海洋一幕劇から*Long Day's Journey into Night*に至るまで」(井上紗央里氏)、「Eugene O'Neill 劇における終わりなき『終わり』探究」(森本道孝氏)、「『不気味なもの』としての「悪魔祓い」(*Exorcism*)——オニールの掘りおこされた一幕劇」(清水純子氏)。また、「オニールのアメリカ」と題されたシンポジウムでは、「移動と労働——Eugene O'Neillの初期海洋劇」(天野貴史氏)、「オニール演劇と放蕩」(大森裕二氏)、「劇作家ユージーン・オニールの『ニューヨーク物

語』(竹島達也氏),「自己を演出するオニールの主人公たち——「ヒューイ」を中心に」(黒田絵美子氏),「ユージーン・オニール, 反逆の演劇の軌跡——詩人, 所有者, 憑かれた者たちの弁証法」(貴志雅之氏)と, 多彩な顔ぶれの講師陣が発表を行った。また, 2012年度の『アメリカ演劇』第24号「テネシー・ウィリアムズ特集Ⅱ」に引き続き, 第25号として「オーガスト・ウィルソン特集Ⅱ」を発行した。内容は以下の通り。「ピッツバーグ・サイクルにおける都市再開発の影響——『二本の列車が走っている』を中心に」(桑原文子氏),「アフリカ系アメリカ人共同体, 人種の遺産継承の政治学——『大洋の宝石』から『ラジオ・ゴルフ』へ」(貴志雅之氏),「『ラジオ・ゴルフ』におけるアフリカ系アメリカ人のマスキュリティ——その再構築に向けてのヴィジョン」(山本秀行氏),「オーガスト・ウィルソンとヒップホップ——ライオンとしてのキング・ヘドリー二世」(川村亜樹氏),「オーガスト・ウィルソン劇が語り継ぐアフリカの価値——音楽, 信仰, 血の継承」(岡本淳子氏),「オーガスト・ウィルソン年表」(竹島達也氏)。いちいち取り上げることはしないが, 学会としての組織改編以降, 研究的蓄積はかなり分厚くなってきていることは以上の紹介からもみてとれよう。さらに望むことがあるとすれば, 国内に充足せず, 海外へいかに発信していけるか, ということになるだろうか。

単独の論考では, 日比野啓氏が相変わらずの健筆で, 「(小声で言ってみる) アメリカの新しい音楽劇について」(『文学』15(2), 岩波書店)や「二重化される意識と「もの」としての世界: Arthur Miller, *Death of a Salesman*における気づきの体験」(『成蹊人文研究』22, 成蹊大学大学院文学研究科)等を発表している。このうち, 『セールスマンの死』論は, 近年流行の兆しがあるが, なかなかオーソドックスな文学研究では応用がむずかしい「情動理論」を使いながらの新たな切り口からの論文である。題名にあるように, 「二重化される意識」, すなわち登場人物の「意識が二重化し, 意識それ自体へと向かう意識と, 意識の外側に広がる「もの」としての世界へ向かう意識とに分裂する状態」「を経験する物語として」(2)同作を読むという意欲的な試みになっている。賛否両論がありうる読み方だが, 『セールスマンの死』のような古典テキストに新たな光を当てようとする氏の意図は十分達成されていると思われる。

その他, 紀要系の論文では, 古木圭子氏の「James A. Herneの*Hearts of Oak*にみるアメリカン・リアリズムの萌芽」(『英米文化』44, 英米文化学会), 貴志雅之氏の「テネシー・ウィリアムズ, 亡霊のドラマトウルギー: 記憶, 時間, エクリチュール」(『大阪大学英米研究』38, 大阪大学英米学会), 大森裕二氏の「真昼に咲く向日葵の夢: テネシー・ウィリアムズ「二人芝居」」(『人文・自然・人間科学研究』29, 拓殖大学人文科学研究所), 「内なる野生のパラドックス: オニールの「朝食前」」(同上30), 穴田理枝氏の「*Topdog/Underdog*に見る想像の家族」(『大阪大学英米研究』37, 大阪大学英米学会), このところ多作の落合和昭氏による「Tennessee Williamsの*The Pink*

回顧と展望

Bedroom: 「ピンク」へのこだわり」(『駒澤大学外国語論集』16, 駒澤大学総合教育研究部外国語第1・第2部門), 「Tennessee Williams の *The Fat Man's Wife*: 『肥満』の意味」(『駒澤大学総合教育研究部紀要』8, 駒澤大学), 「Tennessee Williams の *The Big Game*: “The big game” の二面性と隣人愛」(『駒澤大学外国語論集』15, 駒澤大学総合教育研究部外国語第1・第2部門) 等もあった。昨年度取り上げるべきだった論文としては、伊勢村定雄氏による「オーガスト・ウィルソン作『セブン・ギターズ』の不可解さへの解」(『東京経営短期大学紀要』21, 東京経営短期大学) や「アアント・エスターへの作者のまなざし: 「大洋の宝石」を中心に」(『駒澤大学総合教育研究部紀要』7, 駒澤大学), さらに、森本道孝氏の「『ゴールデン・チャイルド』に見る『改宗』の意味」(『生駒経済論叢』10(3), 近畿大学経済学会), 佐藤里野氏の「読むことのできない文字: スーザン = ロリ・パークスの *In the Blood* 考察」(*Journal of the Ochanomizu University English Society* 3, お茶の水女子大学英文学会) 等もあった。

英国・アイルランド演劇関係では、山崎健太氏の「サミュエル・ベケット『わたしじゃない』上演における観客の知覚について」(『表象・メディア研究』4, 早稲田表象・メディア論学会) のほか、既にその名前に触れた岡室美奈子氏の「瓦礫の上で待ちながら: ベケットと共生の思想」(『文学』15(2), 岩波書店), さらに、本欄で毎年取り上げさせていただいている河野賢司氏による「ヒュー・ホワイトモアの舞台劇『最良の友人たち』註解: 往復書簡に見るバーナード・ショー晩年の交遊録」(『九州産業大学国際文化学部紀要』55, 九州産業大学国際文化学会), 「エンダ・ウォルシュ『チャットルーム』: 解説と試訳」(『九州産業大学国際文化学部紀要』56, 同上), 「映像化されたジャンヌ・ダルク: メリエスからフィリップ・ラモスまでの1世紀」(『九州産業大学国際文化学部紀要』57, 同上), 藤木和子氏「ブライアン・フリール作『フェイス・ヒーラー』: 記憶と言葉が作る虚構的真实」(『ノートルダム清心女子大学紀要, 外国語・外国文学編』38(1), ノートルダム清心女子大学) 等があった。

以上, 2013年度の現代英米演劇研究について概観してきたが, 入手できなかったり, 目を通すことができなかった論文も多々あるかと思う。また筆者の専門がアメリカ演劇であるため, 英国関係の資料調査にぬかりがある可能性がかなり高い。その点について, 最後にお詫びをしておきたい。

(東京大学教授)